

佛說法滅盡經讀後の感

松 木 本 興

一

總べて經典の説く所に對して、是れ佛陀が万年の後を懸記せられたる金文なり、となす信仰的の見方と、少部分の原始經典を除く外は滅後諸賢聖の創造せるものであつて、其の經典の文字は、其の經成立當時に於ける教會の實狀を寫したるものと見る、歴史的、科學的見方とがある。

經典の文字が、金口の梵音を寫せるものにせよ、滅後無名の大士の思惟創造せる所を記述せるものにせよ、其の當時の教會の實狀を物語る事は同一である。此の意味から五万八万の佛教聖典は、其の儘が佛在世及び滅後二千年間に渡る教會史であり、教理史であるといひ得る。

根本原始經典の文字にせよ、佛陀の四衆に對する垂訓であるは勿論なるも、而も其の説ある所以を推尋する時、反面教會の状態即ち其の説あらねばならぬ理由を知る事が出来る。發達大乘佛教の如き、佛陀内証の布衍を佛説の形式に依つてなされしものであり、同時に其の時代の教會相に反撥せら

れて成立せるものが多い。

今の佛說法滅盡經の如きは消極的に教會の衰滅を慨けるものであり、法華經、維摩經、涅槃經、大無量壽經の如き諸大乘經は、積極的に高く理想を掲げて教徒の進路を示し、以つて教會の弊風を矯正せんと企てしものと見る事が出來やう。

二

經典を信仰的に尊奉するにせよ、科學的に其の教理を批判し、歴史的に成立年代を探究するにせよ。是等が既に、我等の聖典であり、修証の羅針である事に異論はあるまい。従つて是を客觀的に物語りを讀むが如き態度に見終らんか、古聖の所謂、終日他の實を數へて自に於いて半錢の分無き、に終るであらう。佛教徒の使命は、經典を自己に反省し、時代に生かす事である。換言せば總ての經典の文字の中に自己の血を通す事が我等の態度でなくてはならない。此の態度で經文の豫言に對し度しん思ふ。

經文の豫言は一様に、惡見の起る時代を末法堯季と説かれてある。其の尤も確然として年代を區分せるは正像末三時の説である。而して末法の徴として、戒定慧無く、僧徒の品位退下し、奴を比丘と

なし婢を尼とし、僧尼嫁娶し、俱に子息あり、袈裟の色變じて其の行狀獵師の如し等々末法の相狀を説く事至れり盡せりの感がある。其正像各千年末法万年といひ、或は正法五百年像法千年末法万年といひ、或は正像各五百末法万年等といふも俱に佛滅を去る尤も遠きを以て、末法といひ堯季と呼べるものであるが、是は且く年代の差に依て正像末に區分せるものであつて、若し實質的にいふならば、強ちに正像を過ぎざれば末法なしと限るべきではない。

時の中心となるものはいつ人も人である。それが佛在世であらうと、滅後であらうと、佛眼に映じたる衆生は、いつも迷へるものであり憐れなる窮子であり、惡見の所有者である。此の意味から衆生を中心として見た場合は、いつも堯季であり、末法である。但個の中、惡見の多少、証悟の有無を批校して滅後三時の區分を生ずるに過ぎないのである。經典の中に指摘せられたる堯季の主体は一切衆生であり、剋實して云へば今經を讀む我々自身であるのだ。佛陀は三千年の往昔、豫言の形式を以つて現在の我々の爲に慨き、我々の爲に説法し給ふたものである。此處に遍法界の佛陀の慈悲に感泣せずには居られないのである。

三

佛說法滅盡經は小乗部に從屬し、僅に八百八十餘文字より成る至つて短い經典で、其の譯出は支那南北朝末期と推定する丈で譯者は不明である。其の説く所極めて深刻に、讀む者をして、寧ろ戰慄せしむるの感がある。何れの經典を見るも、佛陀の將に法を説かむとし給ふや、光明十方に遍く、四衆八部隨喜して之を待ち、説法終るや、歡喜して去るのが常途である。然るに此の經は其の序分に、世尊寂靜。默無_レ所_レ説。光明不_レ現。と説かれ、結文に、四部弟子。聞_レ經悲慘惆悵。皆發_レ無上聖真道意_一。悉爲_レ佛作_レ禮而去。といふ。何すれば斯くも通途の説相と殊るや、其の正宗分に接せば自明である。

蓋し本經正宗分中、法滅盡の相十四ヶ條を舉示してゐる。即ち、

- 一、好飾衣裳。
- 二、飲酒噉肉。
- 三、殺生貪味。
- 四、憎賢嫉善。
- 五、荒撫寺廟。
- 六、偷三寶物。
- 七、貪財不施。
- 八、販賣奴婢。
- 九、耕田種植。
- 十、婬嫉濁亂。
- 十一、不修戒律。
- 十二、懈怠不學。
- 十三、貢高求名。
- 十四、望人供養。

の十四項目、檢し來れば、悉く是れ現代僧衆の實生活を寫せるものである。

其の第一項を見るに、著_二俗衣裳_一樂_二好袈裟五色之服_一。と説かれてゐる。現代所有階級を通じて、僧侶の服裝ほど煩雜にして、絢爛たるものはあるまい。尤も嚴肅なるべき法要時に彼等の服裝を見る時、返つて嚴肅の氣分は殺がれて、拙劣なる假裝行列然たる感さへある。之を在世の僧伽の服裝の森

嚴であつたらうそれに比し寧ろ滑稽なる感がある。何を苦しんで切迫したる經濟狀態の中に在りながら、數十、數百金を投じて、好袈裟五色の服を求め之を着用して得意然としてゐるのか。由來僧侶の生活様式は其の簡素なるを以つて特徴としてゐる。然るに今や、一般社會に於いてさへ生活の簡易化の叫はれてゐる時代、寧ろ其軌範たるべき僧衆が昔日より今日、今日より更に複雑なる生活様式を迎へんとしつゝあるは何ぞや。此處に取り殘され行く階級の姿があり、法滅盡の相がある。我々は先づ服裝の簡易化を叫び、我等の生活より法服單司の必要を除去せねばならぬ。

飲酒噉肉、殺生貪味の弊に至つては餘りに自明にして寧ろいふを欲しない。僧伽のある所酒あり肉あり、然して和合の相は非ずして破和合の叫喚あるのみに至つては論外と云はざるを得ない。

憎賢嫉善に至つては、何の時代も是あるが爲に動亂を免れぬのである。勸持品の三類の強敵の如き亦此の類例であらうが、今の經には、清淨の比丘あり教化平等にして、身を損し物を濟ひ、自ら己を惜まず。設有此人、衆魔比丘、咸共嫉之。誹謗揚惡。擯黜驅遣不令得住。自共於後不修道徳。と説かれてある。是亦餘りに明了なる現代僧衆の實狀ではあるまいか。僧團の和合を缺くは多くの場合、憎嫉が其の最大原因である。教團の分裂然り、宗内の動搖亦然りである。更に、但貪財物。積聚不散。不作福德。に至つては、冷汗三斗たらざるを得ない。

荒蕪寺廟。偷三寶物。貪財不施。亦現實描寫と云はざるを得ぬ。販賣奴婢はやる者無からんも、耕田種植に至ては、天下晴れて行はれてゐる。

姪妖濁亂。不修戒律。懈怠不學。貢高求名。望三人供養。擧げ來れば、悉く以て現在僧衆の不如法ならざるはない。

四

月は村雲の爲に覆はるゝが、月其物は永久の存在である。佛教亦然りて、勝義正法即ち、佛教其物は、万年の後を照すべき力を有すべきも、僧徒不如法の村雲に依つて、世俗正法、即ち民衆と佛教との關係は絶たるゝのである。一般民衆の信仰心の薄りぎ行くを慨く聲は聞くが、それが原因の自己に在る事を恐るゝの聲を聞かない。不修戒律と懈怠不學は蓋し尤も誠心せねばならぬ事ではあるまいか。

傳教大師が、自らの時代を指して、今時は像法最末時也。彼時行事既同「末法」、然則。於「末法中」。但有「言教」。而無「行証」。若有「戒法」。可有「破戒」。既無「戒法」。由「破何戒」。而有「破戒」。破戒尙無。何況持戒（末法燈明記、全三四八五）

と記しながら、尙比叡山上、大乘圓頓の戒壇建立を理想とせるは、煩鎖な形式に束縛せられたる律儀

は無かるべきも、大乘法華の精神に依る戒の永久存続すべきを物語るものである。然り而して其の半生を戒壇建立に奔命し、口頓戒に依る菩薩僧を養成せんとせる、傳教は、其の入寂前諸弟子に遺誡し、若我滅後。皆勿レ著レ服。亦山中同法。依レ佛制戒。不レ得レ飲レ酒。若有レ違レ此者。不レ我同法。亦不レ佛弟子。早速擯出。不レ得レ令レ踐三山家界地。若爲三合藥。莫レ入三山院。又女人輩。不レ得レ近三寺側。何況院内清淨之地哉。毎日長講諸大乘經。懇懃精進。令三法久住。爲レ利益國家。爲レ度群生。努力努力

と云へる叡山も、此の遺誡の精神は、早く既に喪失して、大師をして地下に泣かしむる現狀となり了つた。

天台宗を始め、當時の伽藍佛教の弊を慨き、大聖佛陀の眞意に返り、法華本圓戒の樹立に一生を捧げられた、日蓮上人の流れも、亦再び伽藍佛教に歸り、宗祖の末法無戒の言を惡用して、好飾衣裳乃至求名、望人供養の惡風に身を心を委ねてゐる。

豈唯僧徒のみならんや、不如法なる人程、社會は歡迎するに非ずや。といふ事を止めよ。自らの罪を他に推す事は惡中の惡である。現代の如き、不如法の信者俗衆を作れるは、皆僧衆の罪である事を自覺せねばならない。

法欲_レ滅時。女人精進恒作_二功德_一。男子懈慢不_レ用_二法語_一。眼見_二沙門_一。如_レ視_二糞土_一無_レ有_二信心_一。乃至懸官計尅。不_レ順_二道理_一。皆思樂亂_一。惡人多如_二海中沙_一。善者甚少。若一若二。

餘りにも恐るべき經文ではあるまいか。結文の四部弟子。聞經悲慘惆悵。と云へるも宜なるかなである。若し夫れ、法滅盡經を聞きて、悲慘惆悵せる、四部の衆をして現在あらしめば將して如何、唯々恐畏憂惱死あるのみか。

如日月光明。能除諸幽冥。斯人行世間。能滅衆生闇。教無量菩薩。畢竟住一乘。の文を色讀するの人は出でざるか。